様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：１１３０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５３１１７２

研究課題名（和文）体育カリキュラム・マネジメントにおける教師のリテラシー観の規定性に関する研究

研究課題名（英文）The Determinativeness of Teachers' View of Sport Literacy on the Curriculum Management Process in Physical Education

研究代表者
黒川　哲也（Kurokawa, Tetsuya）

宮城教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：５０３９０２５８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は，児童・生徒の体育授業における学びの実態を明らかにするとともに，教師レベルにおける体育カリキュラム・マネジメントの諸局面における体育教師のスポーツ・リテラシー観の影響を明らかにすることを目的とした．
体育授業における児童・生徒の学びの実態に関する調査と体育教師の目標志向性に関する調査との比較・検討の結果，以下のことが明らかとなった．学習成果の側面から見たとき，授業における「できる」こと（運動有能感の獲得）及び「わかる」こと（実践的知識・理解の獲得）が課題となっており，この二つの要因を含めた高い学習成果を獲得させうる体育教師は，認知・技能目標を重視していることが明らかとされた．

研究成果の概要（英文）：　The purpose of this study to clarify the actual condition of students' learning in ordinary PE class and the efficiencies of PE teachers' sense of sport literacy necessary to ensure students higher perception about usefulness of PE class and learning products, more desirable learning attitude, and more desirable teacher's instruction.Three surveys were conducted: the Learning Career Assess Scale (LCAS) was implemented to clarify the actual condition of students' learning in PE class; Sport View Questionnaire was to clarify the PE teacher's view of sport and; Goal Orientation Inventory for PE Teacher was to characterize their curriculum decision making about curriculum goals.
The findings of this study suggested that the issue was to help students acquire higher knowledge about physical activity and sport and motor competency, and then PE teachers with emphasis to the goals of cognitive learning and motor competency made it sure to deliver the issue of PE class in Japan.

研究分野：体育科教育学

キーワード：スポーツ・リテラシー　カリキュラム・マネジメント　学びの履歴　目標志向性　スポーツ観

１．研究開始当初の背景

今日，人びとが豊かな生活を享受する上でスポーツに関する文化的教養＝スポーツ・リテラシーが不可欠のものとして認知されてきている．ところが，子ども・青年の健康・体力や社会的交際能力等の低下，言ってみれば「スポーツ・リテラシーの土台の崩れ」ともいえる現象がさまざまな国・地域に共通した問題として顕在化してきていた．こうした中，スポーツ・リテラシーを育成するためのカリキュラム改革が各国・地域で実施されてきているが，その前提には，それぞれの国・地域の子ども・青年の生活現実と健康・スポーツに関する学習到達度についての精密な実態把握が不可欠である．この点に関して海野ら（2006）が実施した児童・生徒の体育授業における学びの実態に関する調査においては，(1)学習成果の観点から見た場合，各学校階梯（小学校–中学校–高校）の体育カリキュラムの間に断絶が存在すること，(2)どの学校階梯においてもジェンダーギャップが存在しており，体育カリキュラムにおけるジェンダーバイアスの存在が推察されること，(3)体育授業に対する有用さの認知が学校階梯の上昇に伴って，特に中等教育段階で低下すること，などが明らかにされた．

さらに，鐘ヶ江ら（2010）においては，体育授業における学びの成果・学習への構えの実態と教師の指導性との関係についての調査においては，教師の指導性のあり方が児童・生徒の学習への構えに差異をもたらすこと，特に両者の関係にはより高い学習成果を生み出す三者関係と，逆に児童・生徒の学習成果の獲得を疎外する三者関係が存在することが明らかにされた．このことは，体育科における児童・生徒の学習成果及び学習への構えを高めるためには，ナショナルレベルのカリキュラム改革が重要であることはもちろんであるが，教師の実践レベルのカリキュラム・マネジメントのあり方が決定的な重要性を持っていることが明らかにされた．

２．研究の目的

教師の実践レベルのカリキュラムは，(1)学習指導要領及び学習指導要録，教科及び教育課程に関する各種研修，教育委員会・教育事務所によるモデルカリキュラム等（全国・地域の政策・行政レベル），(2)学校の教育目標及び教育計画，他教科の目標・内容・方法，行事・部活動など教科街の諸活動（学校レベルの教育計画），ならびに(3)各学校における施設・用具などの物理的条件，(4)児童・生徒の学習到達度や発達課題の把握の方法とその内容，(5)学年あるいは体育教師集団の合意形成の内容と方法，(6)教師自身のスポーツ・リテラシー観・教授知識等によって規定される．このうち，各学校及び教師レベルのカリキュラム・マネジメントにおいては(4)～(6)の要因が決定的な意味を持っており，特に諸要因を一つのカリキュラムとして統合していく際の「導きの糸」としての体育教師が持つスポーツ・リテラシー観に着目する必要がある．

そこで本研究においては，児童・生徒の体育授業における学びの実態を質問紙調査を通じて明らかにするとともに，体育科における教師レベルのカリキュラム・マネジメントの実態を事例的に調査することを通じて，教師レベルにおける体育カリキュラム・マネジメントの諸局面における体育教師のスポーツ・リテラシー観の影響を明らかにすることを目的とした．

３．研究の方法

本研究は，

(1)児童・生徒の体育授業における学びの実態（学習成果，学習への構え，教師の指導性，体育授業への有用さの認知）について「学びの履歴測定バッテリー」を用いた質問紙調査を日本及び韓国において実施し，両国における実態を明らかにした．

まず，小学校時代の学びの実態を明らかにするため，調査対象校の中学１年生を対象に，平成 25 年４月（男子 70 名，女子 65 名，計 135 名）及び平成 26 年５月（男子 65 名，女子 56 名，計 121 名）に調査を実施した．また平成 27 年９～10 月に大阪府・滋賀県・新潟県・神奈川県・宮城県・山梨県の中学校２・３年生（２年生男子 124 名，２年生女子 191 名，３年生男子 302 名，３年生女子 360 名，計 977 名，有効回答率 71.3%）を対象に質問紙調査を実施した．調査対象校の生徒もこの調査に含まれていた．また，日本の体育授業の実態の特徴を明らかにするために，平成 25 年３月に韓国（中学１年生 507 名，高校１年生 451 名，大学１年生 424 名，計 1382 名）において同様の調査を実施した．

(2)体育教師集団内でのカリキュラム・マネジメントに関するディスカッションの参与観察及び各体育教師への質問紙調査を通じてスポーツ・リテラシー観（体育科で育てるべきスポーツ・リテラシーに関する見方・考え方・信念）を明らかにした．まず，平成 25～26 年度に小学校・中学校の体育教師 12 名を対象として，体育授業ではどんなスポーツに関する力（学力）を育てるべきだと思いますか」をキーワードとしたイメージマップ調査を実施した．調査結果のうち，体育授業の目標・内容に関する項目を対象に KJ 法によるカテゴリ化を行った．その上で，学習指導要領及び解説に挙げられた目標・内容から各カテゴリを示す質問項目３項目ずつ設定し，18 項目から構成される「体育教師の目標志向性調査票」を作成した．平成 27 年９～10 月に全国の中学校体育教師 15 名を対象としたスポーツ観調査及び体育授業の目標志向性調査を実施した．

(3)体育教師のスポーツ・リテラシー観と体

育授業における児童・生徒の学びの実態との関係を検討するために，上記(1)のうち，平成 27 年９月～10 月に実施した中学校２・３年生を対象とした質問紙調査と(2)の調査で得られた結果のクロス分析を実施した．

(4)教師の実践レベルでの体育カリキュラムの内容と方法を明らかにするために，体育教師集団のディスカッション及び授業の参与観察を実施した．しかし，調査協力校の体育教師が研究期間内に全員異動するなど，調査体制の構築が十分にできなかった．そのため研究機関を延長して対処したものの，当初想定していた成果への到達は不十分にとどまった．

４．研究成果

(1)児童・生徒の体育授業における学びの実態．

平成 25 年４月及び平成 26 年５月に実施された調査対象校における体育授業における児童の学びの実態に関する調査の結果は，鐘ヶ江ら（2010）による先行研究と同様の傾向を示した．つまり，①学習成果次元では，「実践的知識・理解」及び「運動有能感」因子において相対的に低得点であること，②学習への構え次元では，すべての因子得点が高い「学習志向型」の割合が 20%弱に留まること，③教師の指導性次元では，すべての因子得点が高い「教え-学び融合型」が 20%程度に留まる一方で，逆にすべての因子得点が低い「指導放棄型」が同程度存在すること，④体育授業の有用さの認知・学習成果・学習への構え・教師の指導性の間には，正負の二つの関係が存在していたことである．ただし，先行研究で認められた有意なジェンダーギャップは認められず，逆に女子の方が高得点である項目が多数存在した．

しかし，平成 27 年９月～10 月に実施された中学校２・３年生を対象とした調査においては，有意なジェンダーギャップが見られた．このことは，先行研究で示唆された体育カリキュラムにおける階梯間の断絶が小中一貫校においても存在することを示している．

また，韓国においても，学習成果・学習への構え・教師の指導性の各次元及び体育授業の有用さの認知において，さらには各項目間の関係について，日本と同様の傾向が認めら得れた．しかし，小学校から高校まですべての階梯においてより明確なジェンダーギャップが存在しており，特に女子児童・生徒の７割近くが教師の指導性を否定的に捉えていたことが特徴的であった．

(2)体育教師のスポーツ・リテラシー観．

体育教師のスポーツ・リテラシー観を明らかにするために，宮城県の小中学校の体育教師 12 名を対象として，「体育授業ではどんなスポーツに関する力（学力）を育てるべきだと思いますか」をキーワードとしたイメージマップ調査を実施した（齋木・中井，2001）．結果から本研究の目的に沿って，「体育における目標・内容」に関する６つのカテゴリ（「身体・運動能力」「技術・戦術」「スポーツに関する知識」「コミュニケーション能力」「楽しさ感得」「身体活動への合い公的態度」）が抽出された．その上で，学習指導要領及び解説に挙げられた目標・内容から各カテゴリを示す質問項目３項目ずつ設定し，18 項目から構成される「体育教師の目標志向性調査票」を作成した．

この調査票を用いて宮城県・大阪府・新潟県・広島県・滋賀県の中学校体育教師 15 名を対象に，彼らが体育授業において生徒に育て用としているスポーツ・リテラシーを把握しようとした．各カテゴリの合計得点にもとづいてクラスタ分析を用いて分類したところ，体育授業の目標志向性に関して以下の３つのタイプが抽出された．第１のタイプは，６つすべてのカテゴリ合計得点が平均値を上回っており，相対的に情緒的目標及び社会的行動目標を重視しているタイプであり，「情緒・社会的目標重視型」と命名した．第２のタイプはすべてのカテゴリ合計得点が平均知を下回っており，「目標喪失型」と命名した．そして第３のタイプは，技術・戦術カテゴリ及びスポーツに関する知識カテゴリの得点が平均値を上回っており，「認知・技能目標重視型」と命名した．

併せて，体育教師自身のスポーツ観を中島ら（2010）の開発したスポーツ観尺度を用いて調査した．スポーツ観尺度で測定される「スポーツ価値意識」と「スポーツ像」の内，「スポーツ価値意識」については，因子分析の結果「有用性」と「陶冶性」という二つの因子が抽出された．目標志向性と同様に二つの因子合計得点を用いたクラスタ分析の結果，３つのタイプが抽出された．第１のタイプは有用性因子の得点が平均を下回るものの，陶冶性因子は高い得点を示したため，「陶冶性肯定型」と命名した．第２のタイプは，有用性因子，陶冶性因子ともに平均値を下回っていたため，「文化的価値懐疑型」と命名した．そして第３のタイプは両因子ともに平均値を上回っており，「文化的価値肯定型」と命名した．

体育教師の目標志向性とスポーツ価値意識とのクロス分析を行った結果，体育教師のスポーツ観ごとの目標志向性の構成比に統計的に有意な差が存在した．つまり，陶冶性肯定型の教師は，認知・技能目標重視型の目標志向性を持つ割合が高く，逆に文化的価値懐疑型の教師は，情緒・社会的行動目標重視型の目標志向性を持つ割合が高いということが明らかにされた．

(3)体育教師の目標志向性と体育授業における生徒の学びの実態との関係．

体育教師の目標志向性と彼らが指導する体育授業を２年間履修した中学３年生（男子

302 名，女子 360 名，計 662 名）の学びの実態との関係を分析した．

この際，対象となった中学３年生を複数名の教師が指導していたケースが見られたため，中学１年生と２年生の時の体育教師の目標志向性の組み合わせから，「目標志向性パターン」を分類すると，「情緒・社会的行動型のみ」「認知・技能目標重視型のみ」，そして「目標喪失型→認知・技能目標重視型」という３つのパターンが存在した．よって，分析に際しては，目標志向性パターンと学びの実態との関係を対象とした．

まず，志向性パターンと学習成果との関係についてみると，いずれか一学年で認知的目標重視型の教師に指導された生徒の得点がすべての因子及び次元合計点で有意に高くなっていた．次に学習への構えとの関係を見ると，情緒・社会的行動型の教師のみに指導された生徒は，授業拒絶型の構えを身につけている割合が高く，逆にいずれかの学年で認知・技能目標重視型の教師に指導された生徒は，自己ペース型及び学習志向型の構えを身につけている割合が高かった．

そして，教師の指導性との関係を見ると，情緒・社会的行動型の教師のみに指導された生徒は，教師の指導を指導放棄型とみなす割合が有意に高く，逆に目標喪失型→認知・技能目標重視型パターンで指導された生徒は，教師の指導を教え–学び融合型と捉える割合が高かった．

さらに，体育授業の有用さの認知との関係について検討すると，目標喪失型→認知・技能目標重視型パターンで指導された生徒が情緒・社会的行動型の教師のみに指導された生徒よりも有意に高い得点を示していた．

以上の結果から，認知・技能目標重視型の目標志向性を持つ体育教師が，望ましい教師の指導性–望ましい学習への構え–高い学習成果–高い体育授業の有用さの認知という関係性を生み出していることが明らかにされた．この結果は，同一のナショナル・カリキュラムの下であっても，実際の学校レベルあるいは教師の実践レベルのカリキュラムを遂行する体育教師のスポーツ・リテラシー観が児童・生徒の学びの実態を強く規定していることを示している．しかも，認知・技能目標の重視は，学習成果次元で相対的に低得点であった実践的知識・理解及び運動有能観に対応しており，言ってみれば，児童・生徒の必要と要求に応える志向性を持った教師の下で，望ましい体育授業における学びが成立することを示している．同時に，体育授業における児童・生徒の学びの実態に応えうる養成段階及び現職段階での教師教育の内容と方法にも重要な示唆を与えていると言える．

(4)教師の実践レベルの体育カリキュラム・マネジメントの実態

本研究においては，調査協力校における体育カリキュラム・マネジメントの過程を事例的に検討することを方法の一つとしていた．しかし，中心的な調査協力校（小中併設校）においては，平成 25～27 年にかけて大幅な人事異動が生じ，二度にわたる研究体制の組み直しを余儀なくされた．よって，継続的な参与観察は不可能となった．しかし，毎年度の６月～９月の期間に中学校１年生を対象とした小学校時代の学びの実態調査の結果の報告と小中一貫の体育カリキュラムづくりのためのカンファレンスを実施した．同時に，毎年の校内研究会・公開研究会に向けた授業づくりのプロセスを小学校・中学校それぞれの体育教師集団と繰り返す中で，以下のような成果を得た．

平成 24 年段階の小学校体育教師を対象としたイメージマップ調査においては，キーワードとして「調整力（身体・体力）」「関わり合う力（コミュニケーションスキル）」「判断力（態度形成）」といった情緒・社会的行動目標中心の目標志向性が示されていた．また，公開研究会の教科のテーマには「運動の楽しさを味わいながら，主体的に取り組む」ことが掲げられていた．これが平成 27 年度の公開研究会では「人との関わり合いや学習資料，記録を基に動きを比較・分析・検証し，自分たちの課題を解決していく」ことがテーマとして掲げられるようになっている．具体的な授業構成の手立てとしては，「『分かる』・『できる』を構築する単元構成の工夫」「学習資料，記録を用いた学び合いの工夫」が提示されている．ここでは，「実践的知識・理解」や「運動有能感」を高めることを目指しており，明らかに教師集団の目標志向性の変化を表していると言えよう．こうした変化には，上述した体育授業における児童・生徒の学びの実態についての調査結果を共有したカリキュラムづくりのためのカンファレンスが有効に機能しているものと考えられた．

〈引用文献〉

①鐘ヶ江淳一，海野勇三，中島憲子，黒川哲也，現代日本における小学校体育授業の現実–学習成果・学習への構え・教師の指導性タイプとの関連から–，日本スポーツ教育学会第 30 会記念国際大会予稿集，2010，311-316.

②中島憲子，海野勇三，村末勇介，鐘ヶ江淳一，口野隆史，スポーツ・リテラシー研究への一視角–スポーツに関する価値意識とスポーツ観との関連から–，中村学園大学・中村学園短期大学部研究紀要, 42 号, 2010, 137-146.

③齋木あかね・中井隆司，体育授業における教師の実践的知識に関する研究–イメージマップ・テストによる知識構造の検討–，日本スポーツ教育学会第 20 会記念国際大会論集，359-364.

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

① KUROKAWA TETSUYA, UNNO YUZO, TSUZUKI TOMOHIKO, KANEGAE JUNICHI, NAKASHIMA NORIKO, KADOTA RIYOKO, KUCHINO TAKASHI, The Problems of PE Class in Korea Exposed by the Students' Learning Career - Focusing on Like/Dislike Feeling to PE Class, The 2015 International Conference for the 35th Anniversary of the Japanese Society of Sport Education and The 4th East Asian Alliance of Sport Pedagogy Conference Program and Proceedings, 査読有, 2015, pp.104.

② KUROKAWA TETSUYA, JUN KOO SOHN, YOUNG MI JUNG, UNNO YUZO, TSUZUKI TOMOHIKO, KANEGAE JUNICHI, NAKASHIMA NORIKO, How Should We Respond to the Students' Voice?: The Evidence based PE Curriculum Assessment in Korea, Physical education & sports in the age of intercommunication and convergence; The Korea Society for the Study Physical Education,査読無, 2014, pp.31-53.

③ Unno Yuzo, Jun Koo Sohn, Young Mi Chung, Kurokawa Tetsuya, Tsuzuki Tomohiko, Kanegae Junichi, Nakashima Noriko, Assessment of Implemented Curriculum in Ordinary PE Classes: Making a Comparison Japan and South Korea, Physical education & sports in the age of intercommunication and convergence; The Korea Society for the Study Physical Education, 査読無, 2014, pp.19-30.

④ 黒川哲也,体育科における学びの実態と教師教育の課題, SYNAPSE, 査読無, No.26, 2013, pp.44-48.

⑤ 黒川哲也,文化と生活をつなぐ体育授業づくりの課題,教育,査読無,No.803,2012, pp.36-41.

〔学会発表〕（計 8 件）

①KUROKAWA TETSUYA, YOUNG MI JUNG, UNNO YUZO, TSUZUKI TOMOHIKO, KANEGAE JUNICHI, NAKASHIMA NORIKO, KADOTA RIYOKO, KUCHINO TAKASHI. The Problems of PE Class in Korea Exposed by the Students' Learning Career - Focusing on Like/Dislike Feeling to PE Class, 日本スポーツ教育学会第35回記念国際大会, 2015年9月20日, 日本体育大学世田谷キャンパス（東京都世田谷区）.

②Kurokawa Tetsuya, Unno Yuzo, Tsuzuki Tomohiko, Kanegae Junichi, Kadota Riyoko, Kuchino Takashi. An Examination on the Validity of the PE Curriculum Revision in Korea: Based on the Actual Condition of the Students' Learning in PE, The Fifth Pacific Rim Conference on Education, 2014年11月5日, the University of Taipei（台湾）.

③KUROKAWA TETSUYA, JUN KOO SOHN, YOUNG MI JUNG, UNNO YUZO, TSUZUKI TOMOHIKO, KANEGAE JUNICHI, NAKASHIMA NORIKO, How Should We Respond to the Students' Voice?: The Evidence based PE Curriculum Assessment in Korea, Physical education & sports in the age of intercommunication and convergence; The Korea Society for the Study Physical Education,2014年10月24日, Gyeongin National University of Education（韓国）.

④海野勇三, 黒川哲也, 續木智彦. 体育科におけるカリキュラム・マネジメント・プロセスの検討, 日本スポーツ教育学会第34回大会, 2014年10月25日, 愛媛大学（愛媛県松山市）.

⑤中島憲子・海野勇三・鐘ヶ江淳一・續木智彦・黒川哲也, 体育嫌いの児童・生徒の学びの履歴−学習の構えタイプに着目して−, 日本スポーツ教育学会第33会大会, 2013年10月19日, 日本大学文理学部（東京都世田谷区）.

⑥鐘ヶ江淳一・海野勇三・中島憲子・續木智彦・黒川哲也, 体育における学びの履歴とジェンダー−体育嫌いの児童・生徒に着目して−, 日本スポーツ教育学会第33会大会, 2013年10月19日, 日本大学文理学部東京都世田谷区).

⑦Yuzo Unno, Noriko Nakashima, Jun-ichi Kanegae, Tomohiko Tsuzuki, Tetsuya Kurokawa, Urgent Issues and Conditions of PE Class and Curriculum in East Asia, The 2013 International Research Forum in Sports and Physical Education, 2013年8月13日, Philippine Normal University（フィリピン）.

⑧ Tetsuya KUROKAWA, Noriko NAKASHIMA, Yuzo UNNO, Issues on PE Teacher Education in Secondary School: a survey on learning career of school children in Japan, The 3rd East Asian International Conference on Teacher Education Research, 2012年12月6日, 上海華東師範大学（中国）.

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等　なし

６．研究組織
(1)研究代表者
黒川　哲也（KUROKAWA, Tetsuya）
宮城教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：５０３９０２５８

(2)研究分担者
中島　憲子（NAKASHIMA, Noriko）
中村学園大学・教育学部・准教授
研究者番号：００３０１７２１

海野　勇三（UNNO, Yuzo）
山口大学・教育学部・教授
研究者番号：３０１５１９５５

鐘ヶ江　淳一（KANEGAE, Junichi）
近畿大学九州短期大学・保育科・教授
研究者番号：９０１８５９１８